

# 碧と交差する創造の軌跡

桐那谷透

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

愛と平和のために戦う戦士たちがクロスベルの闇に立ち向かう特務支援課と交差する。

零、碧の軌跡に仮面ライダービルド達がクロスオーバーします。

軌跡は初めから、ビルドは本編後スピンオフ前になります。

頑張って完結まで行こうと思うのでよろしく！

# 目次

序章第一節	1
序章第二節	15
序章第三節	29
序章第四節	42



## 序章第一節

ガラガラガラ：

人気の無い倉庫の扉が開かれる

「ゲホツゲホツ！なんだよここ！埃だらけじゃねーか！」

扉を開けた茶髪の男が顔の前を払いながら言う。男の横を通り黒髪の男が入ってくる。

「それくらい我慢しろー。戸籍もない金もない俺たちが屋根のある拠点に住めることだけでも感謝しろよ。俺に。」

黒髪の男、桐生戦兎きりゆうせんじは手近なテーブルの上を払う。

「何でお前になんだよ！この倉庫を第・六・感！で見つけたの俺だぞ！」

「その後持ち主と交渉したり機械修理で当面の資金工面したのはてえんさい物理学者の俺だからな。バカのお前には到底不可能だ。」

「誰が馬鹿だよ！せめて筋肉つけろよ！」

茶髪の男、万丈龍我ばんじょうりゅうがは戦兎の胸ぐらを掴み体を揺さぶる。

「わかった！わかったから揺らすな！埃が：ゲホツゲホツ！」

「ゲホツゲホツ！」

二人が暴れたことで倉庫内に埃が舞い上がる。

「はあ、とりあえずは掃除だな。全部は無理でもせめて寝るところの確保だけでもしな  
いと。」

そう言つて戦兎は懐から取り出した白いパネルの他様々な機械をテーブルに置いて  
いく。

「あ。そういえばあれあるだろ。ほら太陽トレーナーだったか何だったか。」

「太陽トレーナー？ ああ、ライオンクリーナーか。確かにあれ使えば早いな。」

「…お前自分で使つたもんくらい把握しとけよ。」

「把握してるよ！ いっぱいあるから思いつくの時間かかつてるだけだし！」

そう言つて戦兎は先程テーブルに置いた機械に手を伸ばす。

「よし！ そうと決まれば……」

『……………ケテ……』

「ん？」

歯車とレバーのついた黒い機械を手にとつたとき、戦兎の耳にどこからか声が聞こえ

る。

「?万丈何か聞こえたか?」

「あん?何かつて何だよ?」

『……………ケテ…』

「お?」

「…聞こえたみたいだな。一体どこから…」

辺りを見回す戦兎はテーブルに置いた白いパネルに目をつける。

「これからか?」

戦兎がパネルを手にとると急にパネルから強烈な閃光が放たれ周囲が光に包まれる。

「うおっ!何したんだよ戦兎!」

「何もしてねえよ!けど、前にも似たようなことが…」

光が消えたときには戦兎と万丈、テーブルにあつた機械も白いパネルも消えていた。

「ええっ!?!」

ゼムリア大陸クロスベル自治州駅前通りの階段を降りた先にある扉の前。そこに5

人の人間が集まっていた。

驚きの声を上げた茶髪の青年、ロイド・バニングス。

「も、潜るって……」

腰ほどまであるプラチナブロンドの長髪のどこか品の良さを感じさせる女性、エリー・マクダエル。

「おいおい。どういうことツスカ？」

長い赤髪を、首の後ろで束ねた男性、ランデイ・オルランド。

そして青い長髪を、ツインテールにした少女ティオ・プラトー。

「お前たちの総合能力、および実戦テストのためだ。」

その四人に向かい合う壮年の男性、セルゲイ・ロウ。

「ジオフロント内部はそれほど手強くはないが魔獣のたぐいが徘徊している。それらを掃討しながら一番奥まで行ってもらおう。」

彼らはクロスベル警察の新設される部署、特務支援課のメンバーである。

「この『特務支援課』がどんな仕事をするのか、これから素敵な場所で見つくりと教えてやろう。」

そう言つて連れてこられたのがここ、ジオフロントへの入口であった。



魔獣の掃討は捜査官の仕事ではないのではないか？

警察学校を卒業し、難関の捜査官の資格も取得しているロイドが疑問を口にしているが、セルゲイは特務支援課は違うと言いロイド達に携帯端末のようなものを渡す。

「これは……」

「新型の戦術オーブメント？」

「へえ……ずいぶん洒落たデザインだな。」

「第5世代戦術オーブメント、通称『ENIGMA』……ようやく実戦配備ですか。」

「ああ、財団の方から先日届いたばかりの新品だ。お前たちの適性に合わせてすでに調整もされている。」

セルゲイはENIGMAの使い方方のレクチャーをテイオに頼むとロイドに入り口の鍵を渡す。

「それじゃあ、一通り魔獣を掃討したら本部に戻ってこい。細かい話はその後してやろう。」

それだけ言つてセルゲイは本部に戻ろうとする。

「ちよ、ちよつと課長！」

「ああ、それとロイド。」

ロイドが呼び止めるとセルゲイは思い出したように振り向き、

「とりあえずお前、リーダーな。」

「えっ。」

「今の所、捜査官としての正式な資格を持っているのはお前だけなんだよ。そんなじゃ任せたぞ。」

固まるロイドをよそにセルゲイはそのまま去ってしまう。

「ハツハツハ。押し付けられちまったなあ?」

「ふふ、でも捜査官の資格を持っている人がいて心強いです。ロイドさん、よろしくおねがいしますね。」

「あ……いや、呼び捨てでいいよ。見たところ、歳も近いみたいだし」

ランディとエリイに声をかけられようやく動きだすロイド。

「そう? ちなみに私は18だけど?」

「ああそれなら同い年だ。えっとあなたたちは?」

「俺は21だが、堅苦しいからタメ口でいいぜ。よろしくな、ロイド、エリイ。」

「ええ、こちらこそ。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

そして最後の一人に目を向けるロイド。

「……えっと……それで、君の方は……?」

「…14ですが、問題が？」

少し不満げに答えるティオ。

「い、いや〜。別に問題があるわけじゃ…って、14歳ツ!？」

「ハハ、なんだ。見た通りの歳ってわけか。」

「驚いた…そんな若くて警察に入れるものなのね。」

「いやいや!どう考えてもおかしいから!確か一般の警察官でも16歳以上だったはずだし……」

勘違いしそうになるエリイに訂正しロイドは訪ねる。

「日曜学校も卒業していない子がどうして警察なんか……」

「……正確に言うとなたしは警察官ではないです。エプスタイン財団から出向要員ですの。」

当然の疑問だろうと答えるティオに3人は驚く。

「ええっ!」

「エプスタインっていやあ、さっきの戦術オーブメントの……」

「そう……なるほどね。ここ数年、クロスベル市が財団と協力して大規模な計画を進めているのは聞いていたけど……」

『導力ネットワーク計画』ですね。そちらにも少しは関わっています。わたしの出向目

的は別にあります。これです。」

そう言つてティオは機械でできた杖のようなものを取り出す。

「それは……」

「機械仕掛けの……杖？」

疑問を浮かべる二人にティオは説明する。

オハルスタッツ

『魔導杖』といいます。この新武装の実戦テストのためわたしは財団から出向しました。……ロイドさん。ご理解いただけましたか？」

「ちよ、ちよつと待つてくれ！」

聞いてくるティオにロイドはさらに質問する。

「もしかして……その杖を使って君も戦うのか？」

「……捜査官の資格があるのにずいぶん察しが悪いんですね。」

子供を戦わせられない、ある意味当然の考えで聞くロイドに少しジトツとした目を見ながらティオは答える。

『実戦』テストのために出向したと言いましたが？」

「うっ……」

「まあまあ。ここでモメても仕方ないぜ。」

たじろぐロイドの肩を叩きランデイが言う。

「この先のジオフロントってのがどれだけ危険かは知らないが……まずは、あのオツサ  
ンが押し付けてきた任務をクリアする事を考えようや。」

そう言つて入口の扉に目を向けるランディ。

「そうね……納得できない事も多いけど。」

「……………分かった。すまない、テイオ。気分を悪くしたなら謝るよ。」

二人に言われたロイドはテイオに謝る。

「別に……あなたの反応は常識的だとは思いますが。ところで、」

魔導杖をしまいながら皆に聞くテイオ。

「わたしの武装はこの『魔導杖』ですが……皆さんの武装は何ですか？」

「ああ、それじゃ……俺の得物は、これだよ。」

そう言つてロイドは両手に武器を手にする。

「それは、警棒の一種……？」

初めて見る武器に疑問を浮かべるエリイに、ランディが答える。

「トンファーか。東方で使われる武具だな。殺傷力よりも防御と制圧力に優れているら

しいが……」

「なるほど。警察官らしい装備ね。」

「色々試してみたんだけど、これが一番しつくり来てね。」

そう言つてトンファーをしまふロイド。

「で、エリイとランデイの得物は？」

「私は、これね。」

そう言つてエリイが取り出したのは銀色の銃。

「導力銃……少し古いタイプですね。」

「ずいぶん綺麗な銃だな……」

「競技用に特別にカスタムしてもらつたものよ。旧式だけど、狙いの正確さは期待してくれてもいいと思う。」

「おつ、自信满满だねえ。そんなじゃあ、俺はコイツだ。」

そして最後にランデイが巨大なそれを取り出す。鉄の棒の先端に機械と斧の刃のよ  
うな形のパーツがついている。

「それは……ずいぶん大きな武器だな。」

「中世の騎士が使つたていたハルバードみたいな形ね……」

「…財団の武器工房で見かけたことがあります。導力を衝撃に変換するユニットがついて  
いますね。」

「ああ、スタンハルバードだ。ちよいと重くて扱いにくいが一撃の威力は中々のもんだ  
ぜ。」

「なるほど。ティオの杖がどういいうものかは判らないけど…魔獣との戦闘になったらバランスよく戦えそうだな。」

全員の得物を見たロイドがそう分析する。

「確かに…」

「ま、そのあたりも考えて俺たちを集めたのかもしれない。あのオッサン、とぼけた顔して結構したたかそうだったし。」

「…そうですね。わたしの魔導杖の性能はおいおい説明するとして…先ほど支給された、戦術オーブメントの性能を説明しましょうか。」

「それじゃあ、とにかく中に入ってみよう。まずは安全に気をつけて進んだ方が良さそうだ。」

「ええ、そうね。」

「…了解です。」

「んじゃ、行くとしますか。」

戦術オーブメントの使い方を把握した四人はジオフロントに足を踏み入れる。

「はあー！」

ロイドのトンファーによる一撃がコウモリのような魔獣を壁まで吹き飛ばす。勢い

よく壁に叩きつけられた魔獣はそのまま動かなくなる。

「ふう」

「おつかれさん。中々やるじゃないの。」

「ああ。そつちこそ凄いいパワーだな。」

ジオフロント内部をロイド達は道中の魔獣を退治しながら順調に進んでいた。

「俺とロイドが前衛、お嬢さん二人が後ろから援護。まあ即席のチームならよく出来る方だろ。」

「そうだな。戦闘に問題は無い。あとは早いところもう一人を探さないとな。」

そう言つてロイドが視線を向けた先にはエリイの側にいる男の子がいた。

ジオフロントの探索を進めていたロイド達は途中、中央広場のマンホールから迷い込んだ男の子、アンリを発見する。すぐに保護した四人だったが、アンリから友達、リュウが一緒に入ったことを聞く。魔獣から逃げる時にはぐれたらしい。ロイド達は一刻も早くリュウを見つげるためアンリを連れたままりユウを探すことにする。

「しっかしそれなりに進んだがどこにいらのやら。」

「魔獣から逃げていたならアンリみたいはどこかに隠れているかもしれない。声が聞こえないか気にしながら進もう。」

より警戒を強めながらロイド達は扉をくぐる。



扉の先には広めの通路の先に一際大きな扉があった。おそらく一番奥の部屋への扉だろうがそれよりも先に5人の目にとまったのは通路の真ん中に倒れている黒髪の男性の姿だった。

「っ！大丈夫ですか！」

声をかけながらロイド達は男性に駆け寄る。

魔獣に襲われたのかと心配したが、目立った外傷はないことに少しホツとする。そうしているとな男性がゆっくりと目を開ける。

「ん……んは……」

目を覚ました男性が体を起こす。

「大丈夫ですか？どこか痛いところとかは。」

ロイドが声をかけると周りに人がいることに気づいていなかったのか少し驚く。

「うおっ。あ、ああ。とりあえずは大丈夫だ。」

そう言うとな男性は服をはたきながら立ち上がる。

「えつと、あんた達は？」

困惑を浮かべながら尋ねてくる男性にロイドが代表して答える。

「自分たちはクロスベル警察の特務支援課のもので、自分はロイド・バニングスといいます。あなたは？」

男性は聞き覚えのない単語にハテナマークを浮かべながらも答える。  
「俺は戦兔。桐生戦兔だ。」

いまここに特務支援課と愛と平和を守るヒーローの軌跡が交差する。

## 序章第二節

「俺はランディってんだ。」

「…テイオです。」

「わたしはエリイよ。この子はジオフロントに迷い込んだ子でアンリっていうの。」

「こんにちは。」

「おう。こんにちは。」

ロイドに続いて挨拶を交わす面々。

「戦兎さん。あなたは どうしてここに倒れていたんですか？ここは立ち入り禁止になっているはずですが。」

「あー、俺もよくわからないんだよ。急に気を失って気が付いたらここに倒れてたから。」

ロイドの質問に頭をかきながら答える戦兎。

とりあえず嘘をついているようには見えない。そう判断したロイド。

「そうですか。本当ならすぐに外に連れていきたいところですが、実は今この子と一緒に迷い込んだ友達を探しているんです。このジオフロントには魔獣も徘徊しているの

で急いで探しているんです。」

「魔獣?」

ロイドの話を聞いた戦兎が思わず聞き返す。

「?ええ。ジオフロントに住みついていて魔獣達です。ここに来るまでにもできる限り倒して来ましたが、もしその子が襲われたら大変ですから。」

「魔獣?そんなものがあるのかこの施設には。ジオフロントって言うていたけど何かの研究施設か?」

いや、話し方からして危険ではあるがそう珍しいことではないみたいだな。そんなものが珍しくない国があるのか?

それにさつき言つてたクロスベル警察、クロスベルなんて地名聞いたことがない。いったいここは…)

ブツブツとつぶやきながら深く考え込む戦兎にロイドが声をかける。

「あの、ホントに大丈夫ですか?気分が悪いとか…」

「んっ、ああ!悪い悪い。ホントに大丈夫だ。体はなんともないよ。」

「それならいいのですが。それで子供を探している間、私達に付いてきてください。なるべく戦力を分散したくありませんし、あなたを一人で帰らせるわけにも行きませぬので。同行している間は私達でお守りしますのです。」

「もちろんかまわない。早いところ子供を見つけてやるのが第一だからな。それに自分の身くらいはある程度守れるからその子の方を守ってやってくれ。」

ロイドの提案を快く受け入れられる戦兔。戦兔の返事に頷くロイドは皆に指示を出す。

「よしそれじゃあ搜索を再開する。きつとその扉の奥が最深部だ。もしそこにいなかったら来た道を引き返しながらリュウくんを探そう。」

どこかですれ違ったりしているかもしれない。アンリくと戦兔さんは俺たちの後ろを離れないように。」

「りよーかい。」

「了解しました。」

「ええ。わかったわ。」

「は、はい!」

「おう。了解だ。」

「く、くるなよ〜っ! うわあん、助けてえっ! 女神さま〜っ!」

扉をくぐった6人の耳に飛び込んだのは少年なものと思しき悲鳴だった。

正面の階段を登った先に見えたのは5体のスライムのような魔獣に囲まれた男の子。

「あっ！」

「リュウっ！」

アンの叫びで彼が探していたリュウくんだとわかった。

（くっ！どうすべきだ！このまま背後から奇襲すべきか、それともこちらに注意を引き付けるのが先か！ここは…）

「エリィ！奴らの注意を引き付けてくれ！」

「分かった！」

階段を駆け上がったエリィは抜き放った銃で魔獣達に発砲する。ダメージはそれほど無いだろうが注意を引き付けるには充分だったようで、魔獣達はロイド達に寄ってくる。

「何とか注意を逸らせたみたいです。」

「よし、片付け…っ！まずい！」

近づいてくる魔獣たちを倒そうとするロイドだったが、攻撃を受けたにもかかわらずリュウに一番近かった魔獣はこちらに向かわずリュウへ近づいていく。

「くっ！間に合うか！」

強引に魔獣たちの間を通り抜けてリュウを助けに行こうとするロイドだったが

シヤカシヤカシヤカ：

何かを振るような音が聞こえたかと思うと、ロイドの後ろから何か飛び出している。それは魔獣たちを飛び越えてリユウの前に着地する。

「お前の相手は向こうだよつと！」

飛び出した影、戦兔はいつの間にか取り出したドリルのような武器で魔獣を無理やりロイドたちの方へふっ飛ばす。

「後は頼むぞー！」

「……っ！分かった！ありがとう！」

一瞬呆けていたロイドだがすぐに切り替えて魔獣たちと戦い始める。

戦闘自体はすぐに終わった。物理攻撃が効きにくい魔獣たちだったため、ロイドとランデイが引き付けて後方からエリイとテイオがアーツで狙い打つ。

「ふう。」

「何とか片付いたわね。」

「最初は肝が冷えたけどな。」

「……疲れました。」

「戦兎さんも、先程はありがとうございました。」

「気にすんな。あれくらいこのてえんさい物理学者にかかればちよろいもんさ。」

「て、てんさい?」

「…自分で言うんですか。」

「び、びつくりしたあ…!」

「リュウ、大丈夫!? ケガとかしてない!」

「う、うん…:…ぜんぜんへーキだぜ。それよりオマエも無事でホントーによかつたぜ!」

魔獣達が退治されると心配そうにリュウに駆け寄るアンリ。

「オマエ、どんくさいからなく。オレが頑張つて助けてやしないと魔獣に喰われちゃう

と思つてさあ。」

「よ、よく言うよ。自分だつて魔獣に食べられそうになつてたくせに…:…だいたい今度

だつてリュウが入ろうつて強引に…:」

「な、なに言つてんだよ!」

「最初に『じおふろんと』の話をし始めたのはオマエの方だろー!」

「だ、だからつて本当に入るとか言い出すなんて…:…!」

最初は互いを心配していたのがいつの間にか言い争いな発展してしまう。

「はいはい。言い争いはそこまでだ。」



そこで二人ははつとしてロイドに向きなおる。

「ご、ごめんなさい。」

「へ、兄ちゃんたち、初めて見るカオだね。」

素直に謝るアンリと違い、ロイド達を興味深そうに見つめるリュウ。

「けっこう強いみたいだけど新人のヒトたち?」

「へ……」

「つたく、調子のいいガキンチョだな。助けられたんだっただけはお礼を言うのが先  
だろ?」

「へへつ、まあ助かったよ。」

ランディの注意に笑顔を浮かべて礼を言うリュウ。

「危ない所もあったけどオレもカスリ傷ひとつ無かったし。割と手際がいいんじゃない  
?」

「そりやどうも……つて、ホント調子いいなあ。」

「まあ怪我が無いならいいさ。」

「ふふ、ホントに無事で良かった。とにかく一度、外に出るとしましょうか。」

「そうですね。どうやら終点みたいです。一応、セルゲイ課長の課題もクリアしたこ  
とになりますね。」

「ま、こんなハプニングがあるとは思ってもなかったけどな。そんじゃ、ガキどもを送ったら警察本部に戻るとするか。」

「ああ。そうだ、戦兎さんも警察までご同行してもらっていいですか？一応詳しく話しを聞きたいので。」

「まあ子供の迷子ならともかく、経緯がわからないとわいえ不法侵入だからな。仕方ないか。」

「……………」

「ん？どうしたんだ？」

「あのさ…………兄ちゃんたち。兄ちゃん達ってやっぱり新人なんだよな？」

「あ、ああ…………そうだけど。しかしよく分かるな？制服だつて着てないのに。」

「せ、制服？兄ちゃんたち…………ギルドの人じゃないの？」

「えっ」

「ギルドって…………遊撃士協会のこと？」

「ギルドって言ったら他にあるわけがないじゃん。え、なに!?本当に遊撃士じゃないの!?」

「あ、リユウこの人達は、」

「俺たちは、クロスベル警察に入ったばかりの新人だけど…………」

「あつ、俺は違うぞ。」

「ケーサツの人間っ!?! うっそだあ! どうしてケーサツのお巡りがこんなところにいるんだよ!?!」

「あ、ああ……ちよつと事情があつてさ。任務の途中だ君たちを見つけたつて訳なんだけど。……でも、そんなに不思議なことか?」

「だつてさあ! ケーサツのお巡りつていつたら腰抜けつて有名じゃんか!」

「え。」

リュウの言葉に固まる四人。

「態度もオーヘイなわりに何の手助けもしてくれないつて父ちゃんがつてたぞ。いざという時は遊撃士の方が何十倍も頼りになるつて。」

「……………」

「……………やっぱり……………」

（んっ? あの子どうしたんだ?）

絶句するロイド。その時戦兎は少し悲しそうな顔をするエリイに気づいた。

「リュ、リュウ、失礼だよ。いくら警察のヒトだつてボクたちを助けてくれたんだし。」

「そ、そうだけどさく。せつかくギルドの新人に助けてもらったと思つたのに……。」

「ふーん? 色々あるみたいだな。…………つて……………」

何かに気づいたランデイの顔が険しくなる。

「おい、マズイぞ!」

「え……」

「っ!」

「上!」

その言葉にロイドたち3人も入口の上に目を向ける。

「うっ!」

「うわあっ!」

「くっ!」

「なんだコイツは!」

「こいつも魔獣なのか?」

「な、なんて大きさ……」

上から落ちてきた魔獣はさっきの魔獣の十倍はあろうかという大きさだった。無数の触手をうねらせてこちらに戦意を向ける。その姿からかなりの戦闘力を持っていることが予想されるが、一番大きな問題は

「まずいです。背後の扉はロックされています!」

魔獣の位置が唯一の出口の前であることだった。

「くっ……このままじゃ!」

「おい、どうするつもりだ!? まともによっても今の装備じゃ勝ち目はねえぞ!」  
「分かってる!」

「ここは俺が引き付けるからみんなは何とか脱出してくれ!」

ロイドの提案に驚愕する5人。

「ちよ、ちよつと!」

「正気ですか…?」

「この状況じゃそれしか方法はない! ランディと戦兎さん! その子たちを抱きかかえてとにかく隙をついて逃げてください!」

「ちっ…それしかねえか…!」

渋々ながらもロイドの言うとおりでと納得するランディ

「そ、そんな……」

「に、兄ちゃん……」

リュウ達が怯える中、覚悟を決めるロイドの肩に手が置かれる。

「かつこいいじゃないの。でもここはこの天才物理学者に任せておきな。」

そう言つて戦兎は魔獣の前へと進み出る。

「だめだ戦兔！民間人を囷になんてできない！下がっててくれ！」

自分が行く。そう言つて戦兔を呼び止めるロイドの前で戦兔は懐から歯車とレバーのついた機械を取り出す。

「囷になる訳じゃないよ。」

取り出した機械を腰にあてると黄色の帯が巻き付き機械が腰に固定されベルトになる。

「言つたら？任せとけつて」

次に取り出したのは赤と青の小さな筒のようなもの。

「さあ、実験を始めようか。」

そう言つた戦兔が両手それぞれに持った筒を振り始める。

シャカシャカシャカ：

さつき戦兔が飛び出した時に聞こえた音が聞こえてくると、ロイド達の後ろから空中を数式が流れていく。

「うわあ！なんだこれ！」

「…何かの数式でしょうか？」

「どっから来たんだこれ？」

困惑するロイド達をよそに戦兔は筒、『フルボトル』を機械、『ビルドドライバー』にセツトする。

ラビット！

タンク！

ベストマッチ!!

ベルトから響く声と軽快な音楽。戦兔がベルトのレバーを回し始めるとベルトからパイプのようなものが伸び、戦兔の前後に四角く展開される。前方の四角の中には赤いアーマーが、後ろの四角には青いアーマーがそれぞれ半分ずつ形成される。そして再びベルトから声が響く。

「Are you ready?」

ベルトからの問いかけに格闘技のような構えを取りながら戦兔は答える。その言葉を。

「変身！」

戦兔が叫ぶと同時に前後のアーマーが戦兔を挟み込む。

鋼のムーンサルト！

ラビットタンク！イエイ！！

そして現れたのは赤と青が螺旋を描くアーマーに身を包んだ姿。

「戦兔？その姿はいつたい？」

ロイドの口からこぼれた疑問に戦兔は名乗りを上げる。

「ビルド。仮面ライダービルド。作る、創造するって意味のビルド。以後、お見知りおきを。」

これから多くの困難が待つこの街に仮面ライダーが現れた瞬間である。



## 序章第三節

腰を落としたビルドは赤い装甲に覆われた左足で飛び上がる。先の魔物を飛び越した時以上のスピードで接近するビルド。

魔獣は触手を伸ばして迎撃しようとするが、巧みなステップでそれをくぐり抜ける。懐に飛び込んだビルドは勢いのまま青い装甲の左拳を叩きつけるが、ブヨンとした感触に跳ね返される。

「うおっと。打撃は効きにくいんだったな。」

魔獣の体当たりを横に飛んで回避しながらビルドは腰のベルトに手をかざす。

するとベルトから細いパイプのようなものが伸び、先程使っていたドリルに取手がついたような武器が現れる。

「はあっ！」

手に取ったそれで魔獣の体を斬りつけるビルド。しかしわずかながら切り飛ばしたゼリーののような体もすぐに元通りになる。

「斬撃も効果無しっつと。」

確認するように眩くビルドは再びの体当たりを大きくバックステップで避ける。

距離の開いたビルドに触手が放たれるが、ビルドは武器のドリル部分を取り外し逆さまにしてつけ直す。

そしてまるで銃のように構えると迫る触手を撃ち落としていく。

「あの武器、遠距離にも対応してんのか。」

流れ弾などが子供に向かわないように警戒しながら言うランディ。そのままビルドの銃弾が触手をすり抜け魔獣の体に着弾するが、やはり大したダメージを与えられない。

「戦兔！その魔獣にはアーツが有効だ！戦術オーブメントは持っていないのか!？」

「戦術オーブメント？悪いが持っていない！」

戦兔に弱点を伝えるロイドだったが戦兔の答えに難しい顔になる。戦いに慣れてい

る様子だったのでもしかしたらと持っているのではと思っただけが違ったようだ。

「くっ！俺たちも加勢する！俺が前衛に加わるからアーツで。」

「大丈夫だつて。」

加勢しようとするロイドを遮るビルド。

「任せろつて言つたら？ヒーローの見せ場を取るんじゃないよ。それに」

「そう言つてビルドは新しく鳥のようなレリーフが施された赤いボトルを取り出す。俺にも他の攻撃手段はある！」

軽く振ったボトルを武器の取手のスロットに差し込む。

Ready go!

武器から音声が鳴り、ビルドはその銃口を魔獣に向ける。

ボルテックブレイク!!

銃口から放たれたのはこれまでのエネルギー弾のようなものではなく、高温の炎だった。

アーツの気配もなく放たれた炎に虚を突かれたのか、もろに炎を浴びる魔獣。炎がおさまると全身から煙をあげ苦しそうに体をくねらせていた。

「よし！勝利の法則は決まった！」

そう言いながら右手で頭部のアンテナのような部分をなぞり手を開くビルド。再びベルトのレバーを回し始めるとまたもや彼の背後から数式が流れていく。

Ready go!

数式が消えると流れる音声に合わせて飛び上がるビルド。するとどこからともなく白い曲線グラフのようなものが現れ、その一番下の部分で魔獣を挟み込み動きを封じる。

ボルテックフィニッシュ!! イエーイ!!

グラフの頂点から飛び蹴りを放つビルド。その体はグラフに沿って加速しながら魔獣に激突する。

突き出された青い右足の裏の戦車の履帯型のパーツが魔獣のゼリー状の体をえぐり飛ばしながら突き進み核と思しき球体に激突。

一瞬の抵抗のあと、突き抜けていくビルド。

華麗に着地を決める彼の背後で致命傷を受けた魔獣が爆発を起す。

爆発が収まった場所には魔獣の姿は欠片も残っていないかった。

確実に倒したことを確認したビルドがベルトから2つのボトルを抜き取ると元の戦兔の姿に戻る。

「す、すい…」

「本当に一人で倒しちまいやがった…」

「まっ、このてえんさいに任せておけばざっとこんなもんさ。」

笑顔を浮かべた戦兔がみんなのところに行こうとすると、

ズズウウン!

「…はあっ?!」

「嘘でしょ!」

「…二体目!」

「まずい!」

「兄ちゃんにげてー!」

戦兎の後ろに落ちてきたのは今倒したのと同じ魔獣。仲間を倒されて怒っているのかすぐさま戦兎に触手を振りかぶる。

「やっべっ!」

流石に変身している暇はないのか両腕で上半身を庇い少しでもダメージを減らそうとする戦兎。そこに魔獣の触手が振り下ろされる瞬間、

「やれやれ。中々の力を持つようだが、倒してすぐ警戒を解くのはいただけいな。」

突如上から聞こえてきた言葉に皆の視線が上を向く。

「なっ……」

声の主は一瞬で魔獣に接近したかと思うと瞬く間に魔獣を切り刻み細切れにしてしまった。

「マ、マジかよ……!?!」

「し、信じられない……」

「……見えませんでした。」

「お、俺の見せ場が……」

皆が驚きの声を上げるなか、約1名変なところで落ち込んでいるが、

「すっ、スツゲー!」

現れた男に走り寄るリュウとアンリ

「すげーっ！さっきの兄ちゃんもすごかったけど、すごすぎるよ、アリオスさんっ！  
うっわっ！いいもんみちゃったなあ！」

「あ、ありがとう、アリオスさん！でも、どうしてここに…？」

「ああ、広場のマンホールに子供が入っていくのを見たという報告があつてな。」  
武器をしまいながら話すアリオス。

「しかし無茶をする。もしものことがあつたらどうするつもりだ？」

「ううっ……ごめんなさい。」

「その……悪かったよ。」

気を落とす二人に薄く笑みを浮かべながら声をかけるアリオス。

「フ……まあ、無事ならそれでいい。」

もう夕方だ。とつとと出て家に帰るぞ。」

「うんっ！」

「わ、わかりました！」

元気よく返事をする二人を連れて戻ろうとするアリオス。ふと気づいたように固まったままの5人に体を向ける。

「どうした？お前たちは戻らないのか？」

「え、ああ……」

アリオスの声にようやく動き出す5人。

「そうですね。一緒に戻らせてもらいます。」

「なら、グズグズするな。先程のようなこともある。

最後まで気を抜かないことだ。」

そう言つて二人を連れてあるき出すアリオス。

「……………」

「かあくっ！なんていうオッサンだよ？

まどつてるオーラが尋常じゃないというが…………」

「ああ、半端ない人だったな。」

「…………腕前の方も普通ではありませんでした。

いったい何者何でしょう？」

「そう、あの人…………」

一人、彼のことを知つている様子を見せるエリイ

「お嬢、知つているのか？」

「名前くらいだけだね。」

というか、何で私をそんな風に呼ぶのかしら？」

「いや、何となくノリで。」

「ああ、何となくわかるかも。」

ハハハと笑いながら返すランディに同意する戦兔。

「それで何者なんだよ、あの凄まじいオッサンは。」

「ええ、多分ー」

「アリオス・マクレイン。」

エリイの言葉を引き継ぐロイドに四人の視線が向く。

「クロスベルタイムズで何度か読んだことがある。」

遊撃士協会・クロスベル支部に所属する最強のA級遊撃士。」

皆に背を向けながら話すロイド。

「どんな依頼も完璧にこなし、市民から絶大な信頼を得ているクロスベルの真の守護者

…

《風の剣聖》アリオス・マクレインだ。」

先に戻った3人の後を追って出口から出た5人はアリオスを撮影している女性に気付く。

「なんだ？」

「いや、アリオスさん！またしてもお手柄でしたねえ！」



角度を変え撮影を続けながら話す女性の

「ずさんな市の施設管理の下、危機に陥ってしまった少年たちを鮮やかに救出した手際のよさ！」

最新号にバッチリスクープさせてもらいますから！」

どうやら記者らしい女性の話にテンションを上げるリユウ。

「すっげええ！オレたち雑誌に載っちゃうの!？」

「で、でもそれって、なんかうれしくないような…」

逆にアンリは少々呆れた様子。

「グレイス。あまり騒ぎ立てないでくれ。」

女性、グレイスを知っているらしいアリオスが窘める。

「確かに市の管理も問題だがこの子たちの行動にも問題がある。

偏った記事には感心しないぞ。」

「いえいえ、あくまで読者のニーズに応えているだけですから♪

それに今回は面白いゲストもいるみたいですし。」

アリオスの注意も軽く受け流すグレイス。そして視線を今出てきた5人に向ける。

「!？」

グレイスはアリオスの横を通り抜け5人たちの姿も写真に納める。

「クロスベル警察の未来を背負う『特務支援課』初めての出動！」

しかし力及ばず、いつもと同じように遊撃士に手柄を奪われるのだった！

ああ、未熟さを痛感した若者達は果たしてこの先に待ち受ける数々の試練を乗り越えられるのか!!」

芝居がかかった口調で言うグレイス。

「な、なにを……」

（おいおい……いったいなんだってんだ?）

（マスコミの人間みたいですけど……）

（どうやら《クロスベルタイムズ》の記者みたいね。）

（記者……かあ）

戦兎の頭には仲間の一人が浮かんでいた。

「彼らに関しても決めつけはあまり感心しない。」

困ったような Rond たちに助け舟を出すアリオス。

「一応、この子達を最初に助けたのは彼らだ。」

まあ、ツメは甘かったようだが。」

「!!」

「なにおう!」

「あらら、やつぱりそうなんだ。」

次の一言に顔を険しくするロイドと抗議の声を上げる戦兎。どこか納得したようなグレイス。

「ま、記事で色々書くと思うけどあんまり気にしないでね？」

お姉さんからのエールだと思ってこれからも頑張つてちょうだい。」

励ましているのかどうなのかわからない言葉をかけるも、すぐにアリオスのほうに振り返るグレイス。

「それでアリオスさん。一度、独占インタビューをですぬー」

「それに関しても前に断っているはずだが……」

少しうんざりしたようにため息をつきながら子供たちを連れていくアリオス。グレイスも彼を追いかけて行ってしまう。

「…何でしょう、今の。」

ジトツとした顔で言うティオ。

「俺たちのことをピエロに仕立てようつてはらみてえだが、結構好みのお姉さんだけどちよいとクセがありそうだなあ。」

「まあ、記者つてのは一癖も二癖もあるやつばかりだからな。」

「ふう、そんな問題じゃないでしょう。」

ランディと戦兎に呆れたようにするエリイ。そして動かないロイドに声をかける。

「それでロイド、どうするの?」

「あ、ああ…」

エリイに声をかけられ動き出すロイド。

「…セルゲイ課長が出した課題はクリアしたし、いったん警察本部に戻ろう。

子供たちや戦兎さんの件についてもきちんとして報告しないと…」

その時ロイドのポケットからピピピピという音になる。

「これは…」

「んっ? 携帯か?」

ロイドはポケットから音が鳴るものを取り出す。

「さっき貰った戦術オーブメント…もしかして通信が入ってきているのか?」

「ええ、そうみたいですな。」

ロイドの疑問に答えるティオ。

「その赤いボタンを押せば通信モードに切り替わります。」

「ああ、これが。」

ティオに教えられ、通信に出るロイド。

「えっと、ロイド・バニングスです。セルゲイ課長ですか?」

「あつ、ロイドさん！」

自分達がこのオーブメント持っているのを知っているのは課長ぐらいだと思つたロイドだが帰ってきた声は女性のものだった。

「あの、わたしです。先ほど受付でお会いした、」

「あ、さっきの…えつと一体どうしたんですか？」

相手が誰かを思い出し、要件を聞くロイド。

「えつと、それがですね…その、急いで警察本部に戻ってきていただけますか？なんでも副局長がお呼びみたいです…」

「ふ、副局長？」

## 序章第四節

中央広場近くの階段を降りた先にあるビル。

警察署にて副局長からの小言を言われた後、セルゲイ課長からの通信で案内された特務支援課の拠点だ。

セルゲイ課長から特務支援課についての話しを聞いた四人は特務支援課で続けていくかどうか一晩考えることになった。

「ふう。」

夜、ビルの前でロイドは悩んでいた。このまま特務支援課で続けていくか。課長から聞いた話は遊撃士の真似事の人気取りのようなもの、自分の目標からは遠くなるのではないか。

他の三人に話しを聞いて見れば三人ともすでに心は決まっているようだった。

「よっ。悩んでるみたいだな。」

「戦兎さん。」

入口の扉を開け戦兎が出てくる。戦兎についても行くところはなく、時間も遅いということで今日はビルに止まってもらい、次の日に話しを聞くことになった。

戦兎はロイドの隣の手すりに背中からもたれかかる。

「詳しい事情は知らないけど、俺で良ければ相談に乗るぞ？」

この悩みは特務支援課としてのものなのであくまで部外者の戦兎には聞かなかつたが、せっかくそう言ってくれるならと戦兎の言葉に甘えることにする。

「実は自分たちの特務支援課は新設された部署なのですが、その活動内容は市民の人気取りとしての側面が強いと課長に言われましたね。配属の辞退は可能だと言われたのですが、」

「どうしようか迷っていると。」

「……………はい。すみません。こんな悩み聞かされても困ってしまいますよね。」

苦笑いするロイドに戦兎が言う。

「なあ、そもそも何で警察官になりたいんだ？」

「何でなりたいたいか、ですか。：俺には目標になる人がいてその人みたいになりたいから、ですかね。」

「…なるほどな。」

「……………」

しばらくの沈黙の後、戦兎が口を開く。

「その目標の人に近づくにはどこにいるかは重要なのか？」

「えっ？」

戦兎は続ける。

「俺には警察官のあれこれはわからないけど、別に目標の人みたいにつてのは同じ地位になりたいわけじゃないんだろ？」

「目標がはつきりしてるならどこにいてもどんな立場でもたどり着けると俺は思うけどな。」

「どんな立場でも………」

「それに他の三人は続けるんだろ？ アイツらならいい仲間になれると思うぞ。」

「戦兎の言葉に考え込むロイド。その時中央広場の方に目を向けた戦兎が何かに気付く。」

「まっ、大事なことだからな。存分に悩むといいさ。もしかしたら答えはあの子達がいるかもな。」

「あの子達？」

戦兎は手すりから背を離しおやすみーと言い残してビルに歩いていった。



「ふぁーあ。よく寝た。ベッドだけでもあつて助かった。」

そして朝、遅めに起床した戦兎が一階に降りてくるとちようどロイド達が奥の部屋から出てきたところだった。

「戦兎さんおはようございます。」

「おはようございます。」

「おはようさん。」

「おう、おはよう。」

いい顔になったな。その様子だと続けるみたいだな。」

「はい。昨夜はありがとうございました。」

「大したことはしてないさ。それに決め手はあの子達だろ?」

「お見通しですね。それでは遅くなりましたが戦兎さんのお話を聞かせてもらってもいいですか?」

「おう。こつちにも聞きたいことがあるしな。」

挨拶を交わした特務支援課の面々と戦兎はロビーのテーブルに座る。

「さて、何が聞きたい?」

「そうですね。まずというか、一番聞きたいのは、あなたはいったい何者なんですか?」

「ま、当然の疑問だな。」

「あなたが嘘を言っているようには見えなかったので、気が付いたらあそこになっていたというのは本当だと思います。でも魔獣やオーブメント自体を知らない様子も見られたのが気になって。」

「すごいなロイド。そんなこと気づいてたのか。」

感心するランディに笑みを向けるロイド。

「でも一番気になるのは魔獣と戦ったときのあの力です。」

「私もあんなものは見たことがないわ。」

「私もあんなことが可能な技術は聞いたこともありません。」

エリイとティオも昨日の戦闘を思い出しやはり心当たりがないと口にする。

「戦兎さんは何か悪事を働くような人には見えない。何か事情があるなら話してくれませんか？力になれるかも知れません。」

真剣な目で聞きかけるロイド。警察官として疑うよりもこちらを心配しているその様子を見て、戦兎はくしやりと笑う。

「やつぱりあんたらいい奴だな。こんな見ず知らずの人を心配するなんて。」

「ありがとうございます。それじゃあ話してくれませんか？」

「ああ。一部には俺の推測を交えた話になるけどな。それと、話す前に一つ確認したい

んだが、」

「日本って国に聞き覚えはあるか？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「おーい。大丈夫か？まあ信じられないのも無理はないが。」

「一通り説明が終わると特務支援課の四人は沈黙したまま動かなくなっていた。

「いえ。信じない訳ではないのですが、ちよつと頭がパンクして……」

「まあ無理もねえさ。兄ちゃんの話は驚くばかりだったからな。」

「ええ。信じられないというよりは理解しきれないというか、」

「そりやそうですよ。まさか、」

「……別の世界から来たなんて……」

「戦兔さんの持っていたこの通信端末もかなり高性能です。

導力技術を使わずにここまでのものを作る人をわたしは知りません。」

「それに端末に記録されていた写真の景色も見たとこがないわ。

クロスベル以上に近代化が進んでいる町並みみたいだけどそんな所に心当たりもない。」

「えーと何だっけ？戦兔のいた国が日本って名前でパンドラボックスとかいうアーティファクトみたいなやつで3つに別れたんだっただか。」

「そしてそのうちの一つ、東都で時折現れる怪人、スマッシュと人知れず戦う正義のヒーローとして活動していた。

そのための力が昨日の」

「そう。ライダーシステムで変身する仮面ライダービルドって訳だ。」

戦兔のだいぶ簡略化した話しを聞いた四人は話しを整理し直してようやく理解する。

何とかぎりぎり飲み込んだといったところではあるが。

「そんで3つに別れた国をもとに戻して、スマッシュたちとの戦いが終わったあと」「仲間の一人とともに光に包まれて気が付いたらあそこにいたと。」

「そうなんだよなあ。つたく、どこいったんだあのバカ。」

机に突っ伏す戦兔。

ようやく落ち着いてきたロイドは気を取り直して話しを進める。

「とりあえず戦兔さんの事情はわかりました。それでこれからどうするつもり何ですか？」

「そうだなあ。機械修理とかしてお金稼ぎながらあのバカ探すかな。俺がここにいるならそんな遠くには飛ばされてないと、思う、けど。」

体を起こしとりあえずのプランを話す戦兔。その時黙っていたセルゲイが口を開く。

「なら戦兔。お前、特務支援課に入らないか？」

「ええ?!」

セルゲイの提案に驚くロイド。

「それっていいのか？俺警察じゃないどころかこの世界の人でもないけど。」

「もともといろんな奴らがいるんだ。科学者兼正義のヒーローがいてもいいだろ。身分証明とかはこつちで何とかしてやるさ。」

「ええ…それいいんですか？」

「聞きようによつては身分の偽造ですけど…」

呆れたようなロイドとエリイ。

「何だお前ら嫌なのか？」

「嫌とは言いませんけど、なんでまた？」

質問するランディにセルゲイが答える。

「強いて言うなら面白そうだからかな。こいつなら色んなもんをぶつ壊して行きそうな予感がしてな。」

戦兔に向き直るセルゲイ。

「まあお前さん次第だ。別に今すぐ決めなくてもいいが、」

「いや、折角だしやらせてもらおうかな。」

「ほう。」

即答した戦兔にロイドが聞く。

「ちなみに理由は？」

「警察なら不審者とかであのバカの情報が入るかもしれないからな。」

「不審者なんですか？」

仲間がそれでいいのかというテイオ。

それと、そう言いながらセルゲイを見る戦兔。

「面白そうだからな。」

「くくつ。そりや良かった。」

立ち上がった戦兔はいきなりのイベントに頭を抱えるロイドの前に立つ。

「というわけで、これからよろしくな。リーダー。」

ロイドも立ち上がり、戦兔が差し出した手を取る。

「状況についていくのに精一杯だけど、こちらこそよろしく。戦兔。」